

# スチューデント・アシスタントおよび サポーターの役割の意義と課題 —言語技術教育の観点から—

佐藤 壮広 近藤 裕子 竹内はるか 佐野 正子

## 0. はじめに SA・サポーター制度における「言語技術」教育の重要性 (佐藤壮広・近藤裕子)

大学基準協会が2018年度の大学評価（認証評価）を行った際、その評価報告書において「大学評価結果の用語集」なるものを公開している。その中でスチューデント・アシスタント（以下SA）は、当該単位を修めた学生として授業運営補助にあたる者であると説明されている。さらにこのSAの取り組みは「学習者にとっての学びの質が向上するのみならず、スチューデント・アシスタント（SA）を努めた学生にとって教育のトレーニングの機会となっているほか、学部学生同士の学び合う機会としても機能している」とも述べられている（大学基準協会 2018）。つまりSAという制度には3つの意義・機能が含まれているということである。それら3つを整理するならば、1点目は学習者にとっての学びの質の向上、2点目はSA学生にとっての教育トレーニング、3点目は学び合う場づくりである。文部科学省及び大学基準協会が求めるSA制度が十全に活用されるには、これら3点がセットになって相互補完的になっていることが望ましいのである。

山梨学院大学では、初年次生が履修する「言語技術」という言語スキル系科目で、SA・サ

ポーター制度を活用した授業を行っている。また、授業関連のライティング指導や学修支援を行うための場として「ライティング・サポートデスク」を設置している。SAおよびサポーターの学生たち（以下サポーター）は、このライティング・サポートデスクでも活動している。前期タームが一段落した8月末には合宿を行い、前期の活動の振り返りを実施した。また後期の授業後の2月には、活動全体を振り返る総括の研修会も実施した。

本稿では、これら一連の「言語技術」の授業における学修支援およびレポートや課題文の作成のアドバイスなど、いわゆるライティングの補助・助言を行うSA・サポーターたちが、自身の活動をどのように振り返っているのかを整理し、紹介する。また、彼らの活動とその成果を、先にあげたSA制度の3つの機能と照らし合わせ、その整合性についての考察を行う。

## 1. 山梨学院大学における学生による学 学習支援制度（竹内はるか）

### 1.1 SA・サポーターについて

山梨学院大学の言語スキル系科目は、学生が学生をサポートする役割としてSA、サポーターという2種類の制度を設けている。授業時に学生のサポートをするのがSA、授業時間外

に質問に来た学生のサポートをするのがサポーターである。言語スキル系科目のSAは5名で、「言語技術」の授業を一人1コマ分担当している。いずれも「言語技術」の授業を受講した経験のある2年生の学生である。

SA・サポーターが学びを共有するための場の一つとして、本学には「ライティング・サポートデスク」が設けられている。ライティング・サポートデスクでは、授業時間外に様々な種類の文章表現に関するアドバイスを受けることができる。ライティング・サポートデスクのサポーターは、決められた曜日時限に在室（一人週2コマ）し、質問に来た学生にアドバイスを行う。サポーターもSAと同様に「言語技術」、もしくは「アクティブ・ライティング」の授業を受講した経験のある2年生の学生である。

#### [SA、サポーターの業務]

##### ●スチューデント・アシスタント (SA)

授業時に指定された（割り当ては半期固定）クラスに参加し、受講学生の学習支援学習を行う

##### ●ライティング・サポートデスクのサポーター

授業時間外にライティング・サポートデスクに質問に来た学生の学習支援を行う

## 1.2 2022年度前期のSA・サポーターの活動

前期のSA・サポーターの活動は主に1年生の学生が取り組んだ調査報告型レポート作成に関するものであった。レポート作成を行うための資料調査、テーマ決め、アウトラインの作成、レポート全体の構成についての相談に対して、SA・サポーターたちはそれぞれが自身の調査報告型レポート作成の経験をふまえながらサポートを行っていた。

文章表現のサポートにあたっては「一緒に考える」姿勢を大切にすることを指導した。その

ような中で、SA・サポーターはいずれも佐渡島ほか編（2013）などにあるような書き手の意図を尊重、対話を重視した「書き手が主体となる支援」を非常に重視しながら業務にあたった。前期の振り返りとして、学生からは以下のようなコメントがえられた。

- レポートで困っている学生さんに寄り添い、一緒に解決できるように努力した（KS）
- すべて答えだけ伝えるのではなく、うまくヒントやコツを伝えることができた（KS）
- 「わからないところがわからない」という学生に対して一緒に頭を整理した（SA）

また、活動の中で、SA・サポーター同士の意見交換が学生にとって非常に有意義であることが研修会を通して見えてきた。たとえば、他のSA・サポーターの実践でうまくいっているところを自分も取り入れてみたらうまくいったなどのコメントがあった。ただし、SA・サポーターが直接交流する機会はあまりなく、研修会を除くと日々の業務報告ノート（図1参照）での書き言葉による交流が主となっていた。

## 1.3 SA・サポーター経験から見出された課題

SA・サポーターは、サポートする学生に寄り添うことを意識し、自分の経験をふまえながらできる限りのサポートを実践しており、その点については自分自身でも成長できたという振り返りの声も多かった。

一方で、サポートを行うにあたって不足していた点としてSA・サポーターから多く挙げられたのが、サポートする学生が取り組むことを実際に自分自身でやってみる・復習するという点である。

- 自分自身ももっとレポートを書いてみた

2022年5月30日（月）  
サポーター（SA）報告

2022年6月22日（水）  
サポーター（FU/TA）報告

<p>〈作業集〉</p>	<p>デジタルサイネージのポスト まとめぐいこども脚かよびに! あろけ!!</p> <p>イメージCDにやるのはとても良いと思えるが、 とても難しいところもある。イメージCDの形を ばらばらにするのが先が...かなと思える!</p> <p>予約のシステムもとても良いと思えるが ・気軽さや感 ・思った時に実行できない ・予約の確信が必ず必要に生ずる。 ・行くまでの手順が全くなさ ・この点が懸念、少し心配なところもある</p> <p>QRコードには予約フォームではなく、ライブ配信 動画などを載せるか、動画や広告を載せ QRコードを提示し、ライブ配信を載せるか という点も... 予約QRコードを提示するまで 行きたければ予約システムも良いと思える!! 上から目線が気になります...</p>	<p>今日の記録</p> <p>12月に第10回の授業内容を聞き、P52の引用の仕方 直前に方眼紙の所に気にならざるを考慮して 意識して読まないと、間違いに気がつくことが 多い。11月。1年生の時、昔は感じているように 今日改めて復習をする必要が感じられる。</p>
		<p>実際に相談に来られた学生さんに対して、対応した 内容を詳しく書いてお渡し、とても参考に役立ちます ありがとうございました!</p> <p>レポートの問いについて、まだ相談を受け付けて 無いので、皆で対応をお願いします!! 私も頑張ります!!</p>

図1 サポーター業務報告ノート（他の学生の報告をうけ、今後活かそうとしている）

り、知識をためたりするとさらに学生と同じ視点でアドバイスができそうだと感じた。(SA)

- 1年生の時に学習したことを復習しておくことが重要だと感じた。意外と忘れていた部分や確信がない部分があったが、それでは聞く側が不安になってしまうため、しっかり復習した方がよい。(KN)
- レポートについて、再度各自で復習しておく。(FU)
- 1年生のときのレポートの紙やアドバイスを相互にしたものを持っておくとつまずくところは同じなのでとても良い。(TA)
- 1年生のころ、どのような授業内容を受講していたのかを思い出してみたり、過去の資料が残っていた場合、それをもっておくとう便利だと感じた。(MA)

このように、SA・サポーターは、前もってサポートする学生が体験する取り組みを自分自身で行っておくことの重要性を感じていたことがわかる。

また、チームの一員としての自分を意識し、

お互いとの関係づくりを今後の課題だと考えている学生も多く見られた。SA・サポーター同士の交流は研修会を除くとあまり時間を取ることができなかったため、夏期合宿が初めての大きなチームビルディングの機会であったといえる。その合宿の事前研修では、次のような「チーム」を意識した目標を立てていた（ペアワークで目標を立てた）。

- 「SA・サポーター同士の仲を深め、考えの幅を広げる」(FU, SA)
- 「切磋琢磨」(IC, MA)
- 「お互い思いやりをもって、周りを見渡す」(TA, KA)

ここから、「チームビルディング」を意識する学生が多かったことがわかる。

## 2. 夏期 SA・サポーター研修の実施と成果（佐野正子）

SA・サポーターという学生支援スタッフにとって、支援の質保証は重要な課題の一つである。2022年度に発足したライティングサポー

トデスクの担当教員は、SA・サポーターによる支援の質を高めるため、4月から研修を行ってきた。しかしながら、各スタッフのスケジュールの関係上、全員が一堂に会する機会は少なく、チームとしての一体感を育むには充分とはいえなかった。その結果、SA・サポーターの支援の経験値は徐々に上がってはいるものの、個人間でばらつきがある状況であった。そこで、全員の経験を共有し、チームとしての支援のスキルを向上させるため、時間にゆとりをもたせた合宿形式の研修を企画し、夏期に実施した。研修の目標は、SA・サポーターが目指すべき目的とそのための役割をいま一度確認することとした。また、2022年度前期の支援を振り返り、改善すべき点を明確にし、後期の授業における支援に役立てることも、併せて研修の目標とした。

本節では夏期研修会の内容と成果を報告し、今後の研修における課題を明らかにする。

## 2.1 夏期研修プログラムの概要

研修は、山梨県南巨摩郡の宿泊施設において1泊2日で実施した。実施日程とその内容は表1に示した。参加者の内訳は、SA3名、サポーター2名、教員6名であった。

研修の主な内容は次の2つである。1つは、チームビルディングを目的としたラフティング

(いかだやボートでの川下り) 体験の実施である。チームビルディングとは、チームメンバーがそれぞれの強みを活かして協力しあい、目標を達成する取り組みである。ラフティングでは、メンバーが協力してボートを操り、いくつかの難所を乗り越え、ゴールへと向かう。この活動を通して、難所を乗り越えた成功体験を共有し、チームとしての一体感を高めるため、研修のアクティビティとして採用した。もう1つは、ラフティング体験を通じた「体験の言語化」の実践である。「体験の言語化」は、ライティングスキルの修得活動の1つとして、後期の言語技術Ⅱの授業で行われている。自己の体験を客体化して言語化することにより、メタ認知が高まり、自らを振り返ることが可能となる。本研修に参加するSA・サポーターは、初年次に言語技術Ⅱを履修しており、「体験の言語化」による振り返りの方法はすでに修得済みである。そこで、研修では、2022年度前期の学生支援の状況を、ラフティング体験を手掛かりに振り返るとともに、後期の言語技術Ⅱの授業に行われる「体験の言語化」における学生の学修を支援できるよう、SA・サポーターとしてのスキルアップを目指した。

研修では、SA・サポーターは、1日目のラフティング体験の後、体験の記録動画(約100分)を視聴した。そして、体験がどのような気

表1 研修会日程表

月日	時間	活動内容
1日目	13:30	集合後、ラフティング体験
	17:00	ラフティング終了 宿泊施設へ移動
	17:30	夕食含め自由時間
	20:00	体験の言語化と発表準備 (1) 動画視聴と体験の言語化
	22:00	終了後、消灯
2日目	8:00	朝食
	9:00	体験の言語化と発表準備 (2) 内容の共有とスライド作成
	10:30	レクリエーションと昼食
	13:00	発表と振り返り
	14:30	解散

づきを与えたか、また、その気づきをライティング支援にどう生かせるかについて考察し、各自で「体験の言語化」を行った。続いてその内容を共有しあい、チームとして人間関係の構築を図った。さらに、2日目午後の発表に向けてスライドやフリップを作成した。

## 2.2 「体験の言語化」の口頭発表の概要

2日目の13時から、スライドやフリップを用いた「体験の言語化」の発表を行った。SA・サポーターは、視聴した動画から最も印象的な場面の一つを選んで静止画に加工してスライドに投影し、その写真をもとに1人あたり約5分で「体験の言語化」としての口頭発表を行った。それぞれの学生が述べた内容の一覧は表2（次頁）に示した通りである。

表2を参照すると、SA・サポーターは、ラフティング体験の前後で自らの意識の変化を認識していることが明らかである。自らの意識の変化により、学生に接する姿勢を見直すに至る気づきは、以下のようにまとめられる。

- ①「相談者である学生の視点に立ち、自らの意見を押し付けない」
- ②「励まし合いながらゴールを目指す感覚を学生のライティング支援に活かしたい」
- ③「学生がライティングに対してポジティブな感情が高まるように心がける」
- ④「能動的に学生の困り感を探り、支援する」
- ⑤「支援者たる自分が変化・成長を常に行ってこそ、学生に働きかけることができる」

このように、SA・サポーターは、自らの実践を振り返り、新たな成長の可能性を主体的に認識していた。その一方、このような気づきは、いまだ認識に留まっており、これらをどのように具体的な行動へと落とし込み、後期のラ

イティング支援で実践するべきかという話し合いには、本研修期間内では至らなかった。

今後は、研修の体験から得た学びを活かす技術の修得を、教員が企画し実施していくことが課題となる。

## 3. SA・サポーター経験の成果と課題 ～総括研修会の振り返りから～ (佐藤壮広)

1、2で述べた内容ですでに明らかなように、言語スキル系科目とその関連業務が活動の中心となるため、支援にあたるSA・サポーター自身の言語スキルそのものが問われる。これは、SA・サポーター活動が彼らの言語スキルを磨く「教育トレーニング」となっているということである。この点は、「はじめに」で述べた、大学基準協会が掲げるSA制度の効果の第2点目と重なる部分である。山梨学院大学の科目群は、ICT、キャリア、ヒューマンスキル、言語スキルなどの、いわゆる旧・一般教養科目と、各学部における専門科目とで構成されている。言語スキル系科目におけるSA・サポーター活動は、多くのそのほかの科目で行われるものの中の一つであるかのように理解されがちである。しかしすでにみてきたように、その活動は、「学習者の学びの質の向上」、「SA学生にとっての教育トレーニング」、「学び合う場づくり」という3つの内容を含むものである（大学基準協会2018）。相手に過不足なく物事を説明し、自身の意見を述べ伝える「言語技術」を、これらのSA・サポーター制度を支える教育基盤に明確に据えることで、この制度はより十全なものになると考えられる。SA・サポーター学生らの活動とその振り返りからは、以上の考察が得られた。

本節ではさらに、総括の研修会（2023年2月24日にオンラインで実施）でSA・サポー



ター学生たちが述べたことを整理、分析し、今後の活動に資する幾つかのポイントを明らかにする。振り返りには、記入式のシートを用意し（表3、表4）、シートにある項目について質問するという形で実施した。このシートは、3行3列の計9マスのマトリクスを描き、その中心

に「実現したこと」や「目指すこと」を明記し、残りの8マスに具体的項目を書き出していくという構成のものである。記入項目は、A = 何を、B = いつまでに、C = どのようなスケジュールで、D = どのように遂行し、E = 得られた成果、F = 次なる課題、G = 留意点、H =

表2 「体験の言語化」口頭発表内容

学生	静止画と気づき
MA	<ul style="list-style-type: none"> <li>・静止画「ラフティング途中で5メートルほどの岩場からMAが水中に飛び込む場面」</li> <li>・飛び込む人物を主として注目しがちだが、視点をずらすとその周りの人々の表情が見える。一つの視点だけでなく、様々な視点からこの状況を読み取ることができ、状況に対する理解が深まる。</li> <li>・学生を支援する際、自分の視点にとらわれず、学生の視点に立つことが重要である。</li> <li>・一つの視点にとらわれず、他の着眼点の可能性を探る姿勢を持つ。</li> </ul>
KA	<ul style="list-style-type: none"> <li>・静止画「水の中でメンバー全員と輪になって手をつないでいる場面」</li> <li>・ラフティングの最初はメンバーとのタイミングが合わず、こぎ進めるのに苦戦した。しかし、インストラクターの勧めにしたがい、ボートから水中に意図的に落ちることで、水を恐れる感情が薄れた。また、一度失敗に似た経験をメンバーで共有し、ボートに上がるさいに互いに手を貸して助けあうなどの行動が自然に発生し、皆に一体感と団結力が生じた。この静止画は、ゴールを目前として再度水中に全員で入ったとき、自然と手をつなぎあい、笑顔が生まれた場面である。</li> <li>・誰も置いていかずに励まし合いながら、ゴールを目指す感覚を、学生の支援に活かしたい。</li> </ul>
SA	<ul style="list-style-type: none"> <li>・静止画「ボート内のメンバー皆でパドルを挙げている場面」</li> <li>・メンバーの気持ちが高揚し、一つになった瞬間を示す。経験と感情の共有の大切さがわかる場面である。</li> <li>・ラフティングの初めでは、インストラクターから水中に誤って落ちた場合の対処の方法などの説明があった。ラフティングは初めての経験で、水を恐れる感情があったため、メンバー皆が不安を共有する形になり、場の空気が沈んだ。しかし、インストラクターから水中に落ちることによる危険性はめったになく、当日の水量から判断して安全性は高いと保証され、場の緊張がゆるみ、安心感が生まれた。</li> <li>・ラフティング中に楽しさを言語化し、行動を共にするとポジティブな感情が湧く。</li> <li>・ライティング支援において、1人での作業ではなく、クラスやグループの協働によってポジティブな感情が高まるよう、学生を支援していきたい。</li> <li>・ライティングにおける学生の不安に寄り添うのも重要だが、成功したポイントをほめ、動機づけに活かすことが、より重要だと考えるきっかけになった。</li> </ul>
TA	<p>静止画：「3つのボートがー列に並び、進んでいる場面」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ラフティングでは全員の団結力が問われる</li> <li>・自分から進んで行動することで、ボートの進み方に貢献できる。</li> <li>・ボートが進むにつれ、周囲の情景や川の状況が刻一刻と変化していき、様々な情報が読み取れる。情報をすべて受け取ることによって視野が広がり、知識が蓄えられることが実感できた。</li> <li>・ライティング支援の際、自ら進んで学生の困り感を聞き出すよう努めたい。</li> </ul>
IC	<p>静止画：「ボートの中心にいた漕ぎ手（IC）が、先頭へと位置を変えた場面」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・川遊びの経験がなく、川や水に対して恐れる感情が強かった。そのため、インストラクターに勧められても、他のメンバーのように水中に意図的に入ったり、岩場から飛び込んだりという行動ができなかった。だが、授業でのライティング支援において、「書けない」と述べる学生を励ました経験を思い出し、後輩に行動を促しておきながら、自らチャレンジを放棄している現状を省みることができた。そこで、先頭で漕ぐことによって、チャレンジする姿勢をみずから表そうと試みた。</li> <li>・周囲の人々の行動が自らを変える場合があることを意識できた。ライティング支援においても、周囲の行動が学生の積極性を育てる可能性がある。また、他人を変えたいと思うなら、まず支援者たる自分から変わるべきだと考えるきっかけになった。</li> </ul>

表3 【実現したコトシート】

何を what	いつまでに when	どのようなスケジュールで schedule
経験を他に活かす機会 utilize	【実現したこと】	どのように遂行した complete
留意点 points of attention	次なる課題 assignment	得られた成果 achievement

表4 【目指すコトシート】

(そのために) まず何を what	いつまでに when	どのようなスケジュールで schedule
経験を他に活かす機会 utilize	【目指すこと】	どのように遂行する complete
留意点 points of attention	次なる課題 assignment	期待される成果 achievement

経験を他に活かす機会の計8つである。これらAからHの8項目について学生たちに尋ね、その返答の言葉を拾った。以下、8名から得られたそれらのデータについて項目別に紹介する。

### 3.1 各項目の整理と若干の考察

「実現したことシート」のA～Hの欄を、「実現したこと」、「実現に向けたスケジュール・遂行」、「得られた成果」、「次なる課題」、「留意点」「経験を活かす機会」の6項目に整理し考察する。

#### 3.1.1 【実現したこと】

実現したことについては、次の6つにまとめることができる。

- 1－教えることで学ぶことができた。(MA)
- 2－周りをよく見て的確な指示を出せるようになった。(KA、MU)
- 3－学生の意見を引き出すことができた。(AK)
- 4－積極的に声かけをした。(TA)
- 5－同じ課題に取り組んでお手本を示すことができた。(IC)
- 6－コミュニケーション能力を上げることができた。(KN、FU)

以上のうち、2、3、4、6は、1年生との関係づくり・コミュニケーションに関することであ

る。SA・サポーターは2年生だが、大勢の見知らぬ後輩がいるクラスに入っの学びのサポートは、実践としてはハードルが高かったといえる。言語技術の各授業では、4人ほどで行うグループワークを随時とり入れている。SAの学生は、初めのうちは戸惑いながらも各グループの進み具合を見守り、1年生たちに声をかけていた。根気よく明るく声をかけることで、後期になってようやく1年生たちと授業内に積極的にやりとりする場面も出てきた。ライティングサポートデスクでは、相談にやってくる1年生に対しどのようなタイミングでどう声をかけたらいいかという点で、サポーター学生たちが逡巡する場面もあった。

大学の授業は1年生にとり、初めての場である。また、SA学生もその役割を担っての授業参加は初めてである。各回の授業の内容についても、SA学生たちに教員が事前にしっかりと伝えることが求められる。対人コミュニケーションの能力は、クラスに配置するSA全員が身につけておくべき基本的なスキルである。これらはまた「学び合う場づくり」に関することであり、大学基準協会が示すSA・サポーター活用の成果の一つである。同時にこの「学び合う場づくり」は、「言語技術Ⅰ・Ⅱ」の授業内だけでなくその一歩手前でも磨くべきスキルであり、教員チームもこの点に留意してSA・サポーターの指導にあたる必要がある。教員はも

とより、1年次生とSA・サポーターの学生たちがともに「学びの共同体」(佐藤 2021)の一員としての意識を持つには、工夫と一定の時間を要することは明らかである。これらは学修支援活動において常に留意しておかねばならない。

### 3.1.2 【実現に向けたスケジュールと遂行】

「実現したこと」については、先述のように大きく6点に整理できた。次に、SA・サポーターの学生たちがその実現をどのようなスケジュール(C)でどのように実行した(D)のかという点について述べる。CとDの項目に記入された事項は、以下のようにまとめることができる。

- 1 - 昨年度の授業内容を復習し、1年生に説明できるように準備した。(MA)
- 2 - 学生たちの表情をよく見て、顔と名前を覚えて声をかけ、グループワークで会話や作業が滞っている班に対し積極的に促しを行った。(KA, AK, TA, MU)
- 3 - クラスでの課題発表の前に自身でも課題に取り組み、それを1年生の前で発表し手本を見せた。(IC)
- 4 - ライティングサポートデスクに来る学生に應對しながら、声をかける練習をした。(KN)
- 5 - 初めは訊かれたことに答え、慣れてきたら必要に応じた助言や質問をした。また授業外の学生生活の話題についても話すようにした。(FU)

以上のうち、1と3は、SA学生として事前に授業内容を把握・復習しておくことを重視した実行プランである。単にSA学生を授業に配置するというのではなく、ゴールを明確にした授業デザインの中でどのように教員がSA学生と連携するのかを明確にするという課題を、

この1、3は示唆している。SA学生の実現遂行スケジュールは、授業全体のプランの中に位置づけられることで、SAとしての役割もさらに明確になってくる。またSAの体験が「1年生の授業の復習になった」(MA)という証言もあり、1年次の学修成果を定着させ、さらに展開する機会としてSA制度を位置付け、発展的学修プログラムとしてこれを評価することもできる。またこれらの証言から、学習者だけでなくSA・サポーター自身も「学びの質の向上」を実感していることがわかる。

2、4、5は、先と同様に1年生との関係づくり・コミュニケーションに関するものである。「前期には心にゆとりがなく、学生たちの様子に目を配る余裕がなかったが、後期に入ってから教室での学生の様子がよく見えるようになった」(KA)という言葉が示すように、SA学生にとって教室全体に目配りできるスキルを身につけることが、授業の早い段階で求められる。それが円滑な授業とSA活動につながるからである。

### 3.1.3 【得られた成果】

続いて、SA・サポーター活動によって得られた成果についての記述を整理する。

- 1 - 気おくれせずに他の学生に話しかけられるようになり、コミュニケーション能力が向上した。(MA, KA, FU)
- 2 - 正しい言葉づかいを心がけるようになった。(MU)
- 3 - 同じ課題をこなすことで、相手により納得してもらえる説明ができた。(KA, MA, IC)
- 4 - 困っている学生が見分けられるようになり、相談も受けるようになった。(TA)
- 5 - 相談に来た学生と話すことで多くの価値観や考え方に触れ、固定観念にとらわれず多視



点から思考できるようになった。(KN)

以上から分かることは、SA・サポーター活動によって、対人コミュニケーション力、広い視野や考え方、信頼される人間的な魅力などを当人たちが身につけることができたとしている点である。これらの成果の実感は、学生生活の範囲を越えて、総合的な「生きる力」の涵養としても評価できるものである。以上のように、SA・サポーターの活用による彼ら自身への教育効果は、個々の教科の学びに留まらないものであると考えることができる。

3に関連したコメントとして、「正しい言葉づかいを心がけるようになった」というものもあった。発言の主はSA学生のMUである。彼女によれば、「正しい」とは同世代間でやりとりする「タメ口」でもなく、親しみを演出するようなカジュアルな物言いでもなく、「伝えたいことを的確に伝えること」という意味だという。またMUは、「正しく伝えるための言語技術が必要で、その際に重要なのは“言葉えらび”です」とも述べている。言葉えらびは、具体例をあげて物事を説明することから、抽象的概念でさまざまな現象の意味を解釈することまで、あらゆる言場で話者に問われることである。大学教育では、具体と抽象との往復によって思考を鍛えることが一つの大きな目的とされている。MUは活動を通してそのことに気づいていったのである。中学・高校で行われる受験用の勉強のように、漢字や重要語句の暗記やドリル練習は、大学の授業では無くなる。しかし「正しい言葉づかい」を磨く基礎作業として、『現代用語の基礎知識』などを参照しながらの教養としてのキーワードの習得も、大学教育ではまだ必要である。ただでさえ、本離れや読書量の低下が指摘されている日本の社会状況においては、大学生や社会人になっても怠らずに言葉を磨くことは逆に重要となってきた。

SA・サポーターの活動は、そのことを学生たちが自ら意識する重要な契機となっているのである。

### 3.1.4 【次なる課題】

続いて、1年間の活動を通して明らかになった課題について整理する。学修支援活動においてSA・サポーターたちは、相手に分かりやすく説明し、学びを促す適切なアドバイスをすることが重要であるという点に気づくところまでは到達した。ただ、それを十分に果たしたとは考えておらず、皆が次なる課題としてその点を挙げている。

- 1 - 学生が納得するまで説明できるようにする（説明の能力の向上）。(MA)
- 2 - 口頭の指示・助言だけでなく自身も見本や手本を示せるようになる。(KA)
- 3 - 早い時期に学生が打ち解けられる環境を整え、声をかけることに躊躇しない。(AK、TA、FU)
- 4 - 自身も事前に授業課題に取り組み、その上で助言をできるようにする。(IC)
- 5 - 自分の考えや意見を相手に過不足なく伝えられるようになる。(KN)
- 6 - 授業の進みに遅れ、弱音を吐く学生にも、助言と励ましができるようにする。(MU)

MAは、3.1.1【実現したこと】の項で「教えることで学ぶことができた」と述べた。その上で、次なる課題として「説明能力の向上」を挙げている。この「説明する」という技術については、前期・後期の授業を通して繰り返し訓練を行ってきた。MAは2年次もSAとして授業に参加（実質的には2度目の受講）し、この「説明する」という基本的な技術が重要であることを自身で再確認しているのである。このことは、全学的に展開するSA・サポーター制度

においても、自身の体験や学修成果をふまえた「説明の技術」の習得が不可欠であることを示唆している。上記2、4、5の証言も、これと同様のことを述べたものである。

また、MUの「弱音を吐く学生にも助言と励ましができるようになる」という課題設定は、非常に重要である。なぜならば、2000字のレポートを書くという前期の授業で課される最大の難題を前にして不安に苛まれる1年生は多く、彼らは励ましてくれる良き助言者を必要としているからである。総括の研修会でMUは、後期の授業の後半に「この授業、落とします」という諦めの言葉を1年生から聞かされたと述べた。それを受けてMUは、「次年度にはこのような言葉を言わせないようにサポートをするSAになる」と宣言した。SA・サポーターは、いわゆるスクールカウンセラーではない。1年生のやる気や根気などの精神面での十全なサポートを業務として彼らに課するのは酷である。しかし、「学びの動機づけ」が重要であることは確かであり、教員とSA・サポーターが連携してこれを共通の課題とすることは、授業運営上必須である。

### 3.1.5 【留意点】

SA・サポーター活動で留意すべき点として学生たちが挙げたものは、以下の通りである。

- 1 - たくさん話しかけて名前を覚え、一緒に学ぶ空間を作る。(MA, AK)
- 2 - 自分が緊張することなく明るい態度で、相手が嫌な思いをしない話し方を心がける。(KA, KN, FU)
- 3 - 教室全体に気を配り、質問や疑問には素早く対処する。(TA)
- 4 - 中途半端な手本を見せ、アドバイスするのは逆効果だ。(IC)
- 5 - 話すときの言葉遣いに気をつける。(MU)

上に挙げた留意点は、先の3.1.3【得られた成果】の中で気づいた課題、およびそれを言語化した3.1.4【次なる課題】と連続して把握すべきものである。しかし、シート上でより明確に反省点を記してもらうことを意図し、「留意点」として別立てにした。これらのことから、1、2、5の三つは、打ちとけやすい雰囲気を作るための留意点だということが分かる。3と4は、授業の内容の理解を助けるアドバイザーとしての心構えを示している。これらのことを別様に整理すれば、(1) 学びの場づくりと(2) 学修支援ということになる。(1)と(2)に必要なとされるのは、じつはファシリテーターとしての能力である。プロのファシリテーターでなければ、教室においてこれら二つをセットで進めていくことは難しい。教員側が(1)の部分を引き受け、SA・サポーターは(2)に集中してもらうという授業運営のほうが、彼らの負担が少なく済む。以上の「留意点」の聞き取りで明らかになった重要課題は、教員とSA・サポーターとの間の明確な役割分担とその連携の促進である。

### 3.1.6 【経験を他に活かす機会】

以上の振り返りをふまえ、記入を指示したシートの最終項目は、SA・サポーターの経験の応用・活用可能性について当人たちがどのように考えているのかということである。結果は以下の通りである。

- 1 - レポートやメール、プレゼンテーションでの文章作成における言葉使い。(MA)
- 2 - 授業やアルバイトを含む生活全般、就職活動時や社会に出てからの人間関係構築。(KA, AK, KN, FU)
- 3 - 次年度のSA活動。(TA, IC)
- 4 - 友達の相談に乗る時の会話場面。(MU)

上記から分かることは、SA・サポーターの経験は、大学やアルバイト先、就職活動そして社会に出てからの「言語技術」として活かされるものであると、本人たちが位置づけているということである。後輩学生たちの学修補助にはもちろんのこと、友人との会話にも、経験を活かすことができるのである。

以上に整理・分析してきたことを総合すると、SA・サポーターのシステムが当該学生たちの総合的な人間力を育てる仕組みとして機能するものであるということが指摘できる。そして、その仕組みの核に「言語技術」、つまり事象や考えを過不足なく相手に分かりやすく伝える技術が求められるということも、併せて指摘できることである。

### 3.2 【目指すこと】の整理と考察

「実現したことシート」に続き、本節では「目指すことシート」の内容を紹介し、若干の考察を行う。但し、2つのシートの記入項目（質問）が同じであり、内容も重複する部分が多いため、「目指すことシート」の主題である「目指すこと」、「どのように遂行する」、「留意点」の3点に絞り、それらを併記しつつ以下に整理する。なお、内容の対応が分かるように「どのように遂行する」の部分は矢印「→」で示し、「留意点」は／記号の後に記した。

- 1 - 「言語技術」の授業を1週間の楽しみにする。(MA) → 1年生に率直な意見をきく。自分の経験をふまえて考える。／授業がお遊びにならないようにする。
- 2 - 交流をしながら楽しく一緒に学んでいく。(KA) → 授業中に積極的に話しかけていく。／授業や業務の内容について前もって把握しておく。
- 3 - 親しみやすいSAになる。(AK) → 顔と名前を覚えて声をかける。分かりやすい説明を

心がける。／聞き取りやすい声で話す。一人の学生だけに時間をかけすぎず、全体を見回す。

- 4 - コミュニケーション能力の向上。(TA) → 積極的にコミュニケーションをしていく。新聞を毎日読む。／失敗したことを次に活かす。
  - 5 - 話術の向上。(IC, FU) → 毎日少しずつ本を読む。ライティングサポートデスクでは積極的に利用者に挨拶をする。／気を使いすぎない。相手に即した対応をする。
  - 6 - 後輩SAの育成。(IC) → 研修会を企画する。2022年度のSA・サポーターの間で研修の内容を考える。
  - 7 - ライティングサポートデスクの利用のしやすさを向上させる (IC) → 受付のあとで担当が対応するような病院のような雰囲気を脱する。／SA・サポーターにとって過度な負担にならないよう気をつける。
  - 8 - 周囲の観察力の向上。(FU) → 相談に来て困っている学生がいたら声をかける。相談に来る人の特徴を知る。／気を使いすぎない。相手に即した対応をする。
  - 9 - 綺麗な言葉づかいで対応する。(KN) → 教員の言葉づかいを学び、自分もそれを実行する。聞く立場になり、聞き手が本当に理解できたかどうかを確認する。／教員との会話でしっかり身につける。本を読み、分かりやすく教えるための知識を身につける。
  - 10 - 話しやすく相談しやすい関係を築く。(MU) → 担当教員と相談の上、進める。／1年生とは距離が近くなり過ぎないようにする。
- 以上から分かることは、まず多くのSA・サポーターが教室やライティングサポートデスクの雰囲気作りを意識しているという点である。1、2、3、7、8、10がそれを示している。次

に、自身の知識やコミュニケーション力の向上の必要性を自覚しているという点である。4、5、9がそれを示している。6は、新たに加わるSA・サポーターに自分たちの経験や業務を伝えることを重視したものである。

学修支援の場を良い雰囲気にするのは必要なことだが、それによってお互いの間に馴れ合いや甘えや依存が生じることは避けなければならない。1のMAはそれをしっかりと自覚しており、授業がお遊びにならないようにと留意している。「お遊び」とは何を指すのかということ、MAにさらに尋ねてみる必要があるが、ただただ楽しく過ごすだけでは大学での学びにはならないということである。昨今、初等から高等の教育現場で取り入れられているアクティブラーニングも、「楽しさ」あるいは「やった感」に傾斜する向きがあるのは否めない。

アクティブラーニング型授業には、これまでの知識提供型の授業以上に学びのデザインが必要となる。教員にはその授業デザイン力が求められるわけである。この授業をデザインする際、SA・サポーターの役割を組み込むことが求められる。これは、SA・サポーター制度の運用において非常に重要な点であり、また大きな課題である。10のMUの「担当教員と相談の上、進める」という指針は、それを示唆している。

4及び9は、SA・サポーターとして蓄えておくべき知識や思考力の重要性について自覚したことを示している。相手に物事を分かりやすく説明する、また教えるためには、幅広い知識、語彙力、そして適切な例を示す力などが必要である。これらの力をつけるためには、本や新聞を読み、キーワードを掴んで要点にまとめる訓練をしなければならない。教員の助言ではなく、SA・サポーターの経験がこの自覚を促したことは、非常に重要である。経験から学ぶリテラシーの大切さは、今後の活動の武器にな

ると考えられる。

6にあるICによる「後輩SAの育成」という目標設定は、SA・サポーターの立場から、この制度運営における必須部分を示したものである。学生の指導や育成は従来、基本的に教員が行うこととされてきた。しかし3.1.1及び本節3.1.2でも見てきたように、SA・サポーター制度は、学生どうしの学びも支援するものであり、またそれに即した運営が求められるものである。これらの制度に関わる教員の教育力の向上が、これに併せての課題となる。

以上、「実現したことシート」と「目指すことシート」の整理と若干の考察により、SA・サポーターの活動は当該学生にとって、教えることで学ぶ「学び合い」の経験となっていることが明らかになった。同時に、このシステムをどのように活用し、学生どうしの学び合いをより効果の高いものにしていくかという教員側の課題もあらためて明らかになった。

#### 4. まとめ

「はじめに」でも述べたように、大学基準協会及び文部科学省が定めたSA・サポーター制度のねらいは、(1)学習者にとっての学びの質の向上、(2)SA学生にとっての教育トレーニング、(2)学び合う場づくりの3点である。教育の現場では、これら3点が相互補完的に機能することが望ましい。山梨学院大学の言語スキル科目でのSA活動および学習・教育開発センター・ライティングサポートデスクにおけるサポーター活動を通し、その任にあたった学生たちはこれら3点を実践し、今後の課題を整理すると共に自分たちの学びの質を高めていくことができた。特筆すべきは、SA・サポーターの活動の基礎として新聞や本を読み知識を蓄えて思考力と説明力を身につけることを、明確な課題として意識している点である。また、後輩

SA・サポーターを育成するという指導的立場の自覚が芽生えていることも、重要な点である。本章で取り上げたSA・サポーター学生たちの振り返りの言葉からは、この制度がよき教育トレーニングとして機能していることが分かった。さらにこの制度は、SA・サポーター学生の“言葉で伝え導き、表現する力”を育成する仕組みであることも、研修の振り返りの言葉からもより明らかになった。これらの諸点をふまえ、教員自らも学びの主体となりつつ充実したSA・サポーター活動を支援し、この制度を運用する工夫が必要であるということが、今後の課題として浮き彫りとなった。

#### 【文献】

- 佐渡島紗織・太田裕子編（2013）『文章チュータリングの理念と実践 早稲田大学ライティング・センターでの取り組み』、ひつじ書房。
- 佐藤学（2021）『学びの共同体の創造—探究と協同へ—』、小学館。
- 大学基準協会（2018）「2018（平成30）年度大学評価結果の用語集」、<<https://www.juaa.or.jp/upload/files/accreditation/institution/result/2018（平成30）年度大学評価結果の用語集%E3%80%94確定版%E3%80%9531.3.19.pdf>>（2023年3月6日閲覧）。